

腰と関節の健康を保つには、 どうすればいいの？

お家でできること(ホームケア)

1. 安静

患部を動かすと、状態を悪化させてしまうことがあります。
痛みがある時は、散歩等の運動は控えましょう。

2. おくすり

獣医師の指示の下、必要に応じて鎮痛剤を投与して、
痛みを緩和しましょう。

3. サプリメント

腰や関節をサポートする栄養素を含んだサプリメントを、
補助的に給与しましょう。

4. 体重管理

適度な運動、適切な体重維持を心がけましょう。
筋肉量の維持と、肥満防止に努めましょう。

5. バリアフリーな環境作り

滑りにくい床材への変更、室内段差の解消をしましょう。
一瞬の動きで腰や関節に大きな力が加わり、
負担になることがあります。

6. トリミング

定期的な爪切り、^{あし}肢の裏の毛をカットすることで
滑りにくくなり、足腰への負担を軽減できます。



腰や関節の状態が悪いと どんな症状がでるの？

チェックしてみましょう。

下記の項目が1つでも当てはまるものがあれば、
かかりつけの動物病院に相談しましょう。

- 元気がない
- 走ったり飛び跳ねたりしなくなった
- 動きがぎこちない、動きが硬い
- ちょっとした段差でも嫌がる
- 抱き上げると鳴いて痛がる
- 触られるのを嫌がる
- ^{あし}肢がふらつく、震える
- ^{ほこ}跛行(肢を引きずっている)
- 立ち上がれない

※痛みがあると攻撃的になり、動物の性格に影響を与えることもあります。



 日本全薬工業株式会社
福岡県那珂川市安積町菅川字平ノ上1-1

 獣医医療開発株式会社
埼玉県さいたま市大宮区吉敷町1-133-1

犬と猫の 腰と関節 のお話



文責：獣医医療開発株式会社

どんな検査をするの？

歩行検査:

歩き方を見て、どの肢のどの部分に異常があるのかを調べます。

触診:

腰や関節の腫れ、熱感、痛みの有無を確認します。

神経学的検査:

姿勢や刺激に対する反射を調べます。関節の問題なのか、腰の神経や脳に異常があるのかを鑑別します。

画像検査:

レントゲン検査にて骨や関節の異常の有無を観察します。症状によっては、CTやMRI検査を実施することもあります。

関節液検査:

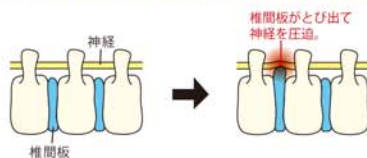
腫れている関節に針を刺して、関節液を採取し、その性状を確認します。

血液検査:

炎症の有無を調べたり、リウマチなどの免疫系の病気の可能性について調べます。



腰の病気 ～椎間板ヘルニア～



椎間板とは、背骨と背骨の間にある軟骨の一種で、腰にかかる負担を軽減するクッションの役割をしています。この椎間板がとび出て、神経を圧迫している状態を「椎間板ヘルニア」と言います。神経が圧迫されることで、痛みや麻痺を引き起こします。

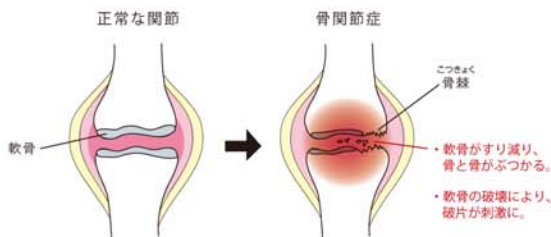
外科的治療:

痛みが重度であったり、または麻痺が認められた場合、手術が適応となります。とび出した椎間板を除去し、圧迫を解消します。

内科的治療:

鎮痛剤などのお薬や、腰をサポートするサプリメントを使用することで、椎間板ヘルニアに伴う症状を緩和します¹⁾。

関節の病気 ～骨関節症(OA)～



骨関節症では、加齢などに伴い関節軟骨が破壊され、関節の痛みや機能不全が起こります。また、関節内に骨棘というトゲができること、痛みを伴う炎症の原因になります。

体重管理や理学療法を実施したり、鎮痛剤やサプリメント等を使用して、骨関節症の症状を管理します。

腰や関節をサポートするのに 良いといわれている栄養素や成分

ビタミンB群 (VB₁、VB₂、VB₆、VB₁₂)

神経賦活化作用や神経修復作用があり、神経の動きを維持・改善させる働きがあるといわれています²⁾。



グルコサミン

動物の皮膚や軟骨、エビやカニの殻に含まれる成分で、軟骨を修復する作用が期待できます。犬の関節症の症状を緩和する作用があると報告されています³⁾。

クルクミン

ウコン(ターメリック)に含まれる黄色の色素で、抗酸化作用と抗炎症作用があるといわれています。脊髄損傷を保護し⁴⁾、また、グルコサミンと同様に、犬の関節症の症状緩和作用があると報告されています⁵⁾。



メチルスルホニルメタン (MSM)

骨や皮膚、そして細胞組織に必要なコラーゲンを健康に保つ働きがあり、体に欠かせない成分です。抗炎症作用および鎮痛作用があるといわれています。

ヘスペリジン

ポリフェノール一種で、ビタミンPと呼ばれるビタミン様物質です。強い抗酸化作用があり、ヒトではアンチエイジングに使われています。

参考文献:

1) Levine JM et al. Vet Surg 36: 482-491. (2007)

2) 内藤尚徳 日本耳鼻咽喉科学会報(1967)

3) McCarthy G et al. Vet J (2007)

4) Ormond DR et al. J Neurosurg Spine (2012)

5) Innes JF, et al. Vet Rec (2003)